

2024年1月14日 久宝教会 降誕節第3主日礼拝メッセージ

「友と共に」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネによる福音書 1章 35-51節

お正月の元日に起きた能登半島地震から半月が経ちました。震度5などの大きな余震がまだ続いていますので、現地で不安を感じておられる方々も、たくさんおられることと思います。とくに寒さも厳しくなってきた、雪も降り積もっているとのことですから、本当に厳しい状況だと思えます。今日が1月14日です。あと3日後には1月17日を迎えます。29年前の1月17日に阪神淡路大震災が起きました。あれからもう29年です。その後2011年に起きた東日本大震災も、阪神淡路大震災に比べると記憶に新しいとはいえ、もう12年も前になりました。

雪の降りしきる中、急場しのぎの避難所に身を寄せ合い、食べる物にも着る物にも事欠き、安心して横になる場所もなく、お風呂はもちろん、トイレにすら困っておられるという報道を見聞きしていると、阪神淡路大震災からの30年間、また東日本大震災からの12年間、この国は「地震大国」「災害大国」と言われながらも、何も変わって来なかった。災害への備えを何もして来なかったということが、改めて思われます。来年に開催予定の万博を中止して、その分の税金を復興に回すべきだという意見が多数出されています。万博は現時点で既に計画通りに進んでいないどころか、このままでは開催自体が間に合わないと言われているにも拘わらず、大阪府も日本政府も未だに「中止はあり得ない」と言い張っています。この国は、一体何を大切にしているというのでしょうか。

沖縄では、県知事や県民らという県との協議を飛び越えて、国交相による代執行という形で辺野古の新基地建設工事が再開されてしまいました。一部の上級国民の意志や利権だけが優先されて、大多数の人々の生活、地方が切り捨てられる政策が、今なお続けられています。その結果が、今回の震災被災地への支援の遅れにも如実に表れているのではないのでしょうか。今、私たちが出来ることや為すべきことは一体何か。そのことは簡単なことではないかもしれませんが、それでも諦めてしまうのではなく、共に考え、行動を起こして行くことが必要なのだろうと思います。そのために、聖書はどのように語っているのかを、聞いてみたいと思います。

今回の聖書のお話は、聖書協会共同訳聖書には「最初の弟子たち」という小見出しが付けられていました。「ヨハネによる福音書」に限らず、4つの福音書の全てにおいて、イエス様はその活動を始めた時に、一緒に活動をする弟子たち、仲間を見つけました。今回の「ヨハネによる福音書」では、最初に洗礼者ヨハネの弟子であった2人の人物が登場して、次にもう1人、その後さらに2人が加わり、合計5人が最初の弟子になったとあります。ですが、他の3つの福音書では人数が4人だったり、顔ぶれ、名前が異なったりしています。ですから、どの福音書が事実で、誰が最初の弟子だったのかということは分からないのですが、イエス様が一人では活動しなかったということ、必ず弟子たち、仲間と一緒に、人と共に活動をしたということは、共通して言えるのではないかと思います。

また「弟子の召命」「任命」などと言うと、如何にも特別な資質や才能があると見込まれたからこそ、イエス様によって見出され、選び出された。イエス様から特別扱いされたという大それたことのように聞こえますが、改めて今回のお話を見て見ると、明らかに「私に従いなさい。ついて来なさい」と言われたのはフィリポ(43節)のみで、後の3人は何だかいつの間にか、気付いたらイエス様にくっついて来ていたという書き方になっています。最初の二人とイエス様とのやり取りも不思議です。イエス様が自分について来る二人に「どうしたの?」と聞いたら、「どこに泊ってるんですか?」と聞いてきたので、「ついてきたら分かるよ」と言っただけのことでした。決して「これから一生、私の弟子になりなさい」と宣告したわけではありませんでした。

また彼らに特筆すべき資質や能力があったから、彼らが選ばれたのかということ、そんなことももちろんありませんでした。他の福音書ではガリラヤ湖で漁をしていた漁師だったと記されていますが、漁師というのは、舟で海に出ていくので命の危険の伴う仕事として、荒れ野で働く羊飼いと同様に、社会的身分も低く、もちろん学識もありませんでした。しかも、46節にもある通り、ナタナエルは、イエス様がナザレの出身だと聞くと、「ナザレから何の良いものが出ようか」と言って、小さなナザレの村を馬鹿にするような人でした。イスラエルの中央の都エルサレムから見ると、北のガリラヤ地方自体が、差別された田舎であったにもかかわらず、そのガリラヤ地方に住む同郷の仲間内ですら、「あんなちっぽけなナザレの村」と言って差

別する、そんなひねくれた心の持ち主だったわけです。

47 節ではイエス様は、そんなナタナエルのことを「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い」と言って、あたかも褒めたかのように訳されていますが、正しくは「この人は正真正銘のイスラエル人だね」と言っただけのことで、要するに「生粋のイスラエル至上主義者、国粋主義者だねえ」というような皮肉の言葉であったと考えられます。48 節には「あなたがいちじくの木の下にいるのを見た」とありますが、日差しの強い土地ですから、いちじくの木は町のあちこちに植えられていて、実をつけるだけではなく、木陰を作っていたのでしょう。ナタナエルはそんな木陰で、ローマ帝国の属国となり、領主ヘロデに支配されている自分たち、イスラエル民族の行く末を案じているような話を大きな声でしていた、その姿をイエス様がたまたま見かけたというようなことだったのではないかと思います。しかし、ナタナエルは、イエス様がそんな彼の顔を覚えていたことに驚き、喜んで、イエス様について行きました。

イエス様に従っていった弟子たちが、この後どのようになって行ったかと言うと、彼らは「1 を聞いて 10 を知る」ような人たちではなく、むしろ「10 を聞いても 1 をも理解しなかった」ようなお話ばかりが続いていきますし、イエス様がいよいよ逮捕されて、処刑されて行くという段階になると、「最初の弟子たち」として書かれて来ている男性の弟子たちは皆、逃げてしまって不在でした。そのことから、彼らとその資質や能力の優秀さの故に、選抜された弟子たちではなかったということが分かります。「コリントの信徒への手紙 I」1 章 27-28 節には、「神は世の愚かな者、弱い者、また世の取るに足りない者や軽んじられている者を選ばれました」とあります。そして、神のそのような選びの理由を、パウロは「知恵ある者を恥じ入らせるために、強い者を恥じ入らせるために」「力ある者を無力な者にするため、無に等しい者を選ばれた」「誰一人、神の前で誇る事が無いようにするためです」と理解していたようですが、これは言い方を変えると、自分の力、人間の力で判断したり誇ったりするのではなく、神の力は「弱さの中で完全に現れる」(コリント II 12:9)ということ、一人一人が体験し、身をもって示すためだったと言えるのではないかと思います。

昨日と今日にかけて、全国大学入学共通テストが行われていますが、その試験

にも象徴されているように、「いつ、どの勉強をするかしないか。何を選び、どこに行くかなどは全て、自分で選び、自分で選んだ結果には責任を持つ」という「自己選択・自己責任」が、あたかもこの社会の原則であるかのように感じられるようになっていきます。しかし、本当にそうなのでしょう。地震や津波、土砂災害などの被災地に住んでいた人たちの多くは、自分で選んでそこに住んだというよりは、昔からその土地に暮らして来ていたというだけの人たちだったのではないのでしょうか。ですから、それを自己選択の自己責任とは言えないはずです。また、ずっと戦争が続けられている現代イスラエル、パレスチナに生まれ、生まれた時から爆撃を受けているような子どもたちには、そもそも選択の自由など与えられてもいません。

私たちが、自分自身の力で考えたり判断したり、選んだりできることというのは、実はとても少なく、そしてその結果に対して責任を取れることもまた、とても少ないのではないのでしょうか。だからこそ、イエス様は「あなたは私に従いますか、従いませんか。一生涯を懸けて従うことができますか、出来ませんか」といって、私たちに選択を迫るのではなく、「私はあなたのことを知っていますよ。私はあなたのことを待っています。ついて来たかったら、いつでもついておいで。あなたはその道を選ぶことが出来て、その道を歩むことが出来る。そのための力と仲間が備えられ、与えられていますよ」と呼びかけてくれているのではないかと思います。

イエス様も一人では活動をされませんでした。その周りには聖書の中に名前が記されている男性の弟子たちだけではなく、名前の残されていない女性たちを始めとする多くの仲間、友たちがいました。友と共に歩む中に、命の神が確かに共にいてくださるということを感じ、様々な失敗や挫折、苦難の中でも、そこから新たな力を得ていったのでしょう。今、困難な状況に置かれ、助けを必要としている方々に対して、私たちが出来ること。諦めてしまうことなく、祈りながら、友と共にまた一歩、今日ここから歩みを進めて参ります。